

10課

6月4日

ヤコブ、 イスラエルとなる



安息日午後 5月28日

暗唱聖句

その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」(創世記 32:29、新共同訳)

その人は言った、「あなたはもはや名をヤコブと言わず、イスラエルと言いなさい。あなたが神と人とに、力を争って勝ったからです」。(創世記 32:28、口語訳)

今週の聖句

創世記 32:22～31、ホセア 12:3、4、エレミヤ 30:5～7、創世記 33章、
創世記 34:30～35:29

今週のテーマ

ヤコブの家族の物語は、良いことも悪いことも続いていきます。しかし、そのすべてを通じて、神はその御手と契約の約束に対する忠実さをお示しになります。今週私たちは、さらにヤコブについて読み進めます。今、彼はラバンの家を離れ、故郷に戻り、ヤコブの裏切りの犠牲となったエサウに会おうとしていました。ひどく不当な扱いを受けた兄は今、どのような報復を考えているのでしょうか。

幸いなことに、この何が起こるやも知れない恐れの中で、父祖たちの神、主は再びヤコブに現れ、後に、「ヤコブの苦しみ(悩み)の時」として知られるようになる出来事について予告されます(エレ30:5～7参照)。押しのける者ヤコブはその夜、「イスラエル」になりました。新たな始まりのための新しい名が与えられたのです。その始まりとは、最終的に、彼の名をとって建国される一つの国家へと続く始まりでした。

言い換えれば、聖書に語られている父祖たちと彼の家族の物語は、そこで起きたすべての不祥事にもかかわらず、神はその約束に忠実であり、約束されたことを成就されることを示し、時には、神の民のすることすべてが、神の約束の成就を妨害していると思えないようなことがあっても、なお神は約束を成し遂げられることを示しているのです。

ラバンのもとを去ったヤコブはまもなく、神との新たな経験をします。ヤコブは、彼の兄が「四百人を率いて」（創32：6、口語訳）やって来ると知り、主に次のように熱心に祈ります。「わたしは、あなたが僕に示してくださったすべての慈しみとまことを受けるに足りない者です」（創32：11〔口語訳32：10〕）。ヤコブは今、本当に、より深く恵みの意味を理解しようとしていました。

さて、神はこの祈りにどのように答えられたのでしょうか。

問1 創世記 32：23～32(口語訳 32：22～31)、ホセア 12：3、4を読んでください。この驚くべき物語にはどんな霊的な意味があるのでしょうか。

ヤコブは家族を守るための手立てを尽くしますが、これから起ころうとすることのために、極度の不安が1人で宿営に残る彼を襲ったとしても不思議ではありません。その時、「ひとりの人」（32：24、口語訳）が彼を襲います。「ひとりの人」は神の臨在を示す特別な暗示のために用いられる呼称です（イザ53：3参照）。ダニエルはこれを天の祭司ミカエルを表すために用いています（ダニ10：5）。この呼称は、ヨシユアが「わが主（ヤハウェ）」と呼んだ「主の軍勢の将」（ヨシユ5：13～15、口語訳）の描写にも用いられています。

実に、その格闘の最中に、ヤコブは自分が神ご自身と闘っていることをはっきり自覚します。それは彼の「いいえ、祝福してくださるまでは離しません」（創32：27）との言葉にも表れています。しかし、去らせないよう神にしがみつくと彼のがむしゃらさは、赦されたい、神の前に正しくありたいとの彼の懇願を表しています。

「欺瞞^{ぎまん}によって長子の特権を獲得するという罪にヤコブを陥れた誤りが、彼の前にはっきりと示された。彼は、神の約束に信頼せず、神が、ご自分の時と方法によって達成しようとされることを、自分の努力で実現させようとした」（『希望への光』98ページ、『人類のあけぼの』上巻216ページ）。

そして、彼が赦されたことの証拠として、彼の罪を思い起こさせる古い名から、彼の勝利を記念する新しい名に変えられます。天使は言います。「お前の名はもうヤコブ〔押しのける者〕ではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ」（創32：29〔口語訳32：28〕）。

あなたは去ろうとする神と闘った経験がありますか。その経験はあなたにとってどのような意味を持っていますか。私たちにとって、時にそのような経験が重要であるのはなぜですか。

ヤコブが神と格闘した場所である、「神の顔」という意味のペヌエル（創32：31〔口語訳32：30〕）から、彼は兄に会うために出発します。やがて、兄との離別から20年、400人を引き連れてやって来る兄が遠くに見えます（同33：1）。ヤコブは不測の事態を考えて家族を備えさせ、自分も備えます。

問2 創世記33章を読んでください。ヤコブがペヌエルで神の顔を見た経験と、その後、兄の顔を見る経験との間にはどんな関係があるでしょうか。両者の関係は私たちの神との関係、そしてそれがだれであれ、私たちの「兄弟」ととの関係においてどのような意味を持つでしょうか。

ヤコブは兄に会う前に七度地面にひれ伏し（創33：3）、兄を何度も「ご主人様」と呼び（同33：8、13、15）、自分を「僕」と呼びます（同33：5を同32：4、18、20と比較）。明らかに、ヤコブが七度地にひれ伏したのは、父の七つの祝福と呼応します（同27：27～29）。さらに、彼はひれ伏すことによって、とりわけ、「多くの国民がお前にひれ伏す」（同27：29）との父の祝福の言葉を逆転させます。

それはまるで、ヤコブが兄に対する負債を支払い、盗んだ祝福を兄に返すことを意図したかのようです（創33：11）。エサウは弟を見ると、あらゆる予測に反して、ヤコブに走り寄り、殺すかわりに彼を「抱き締め、首を抱えて口づけし」ます（同33：4）。

後に、ヤコブはエサウに「兄上のお顔は、わたしには神の御顔のように見えます」（創33：10）と言います。ヤコブのこの異例の口上は、エサウが彼を赦していること知ってのものでした。ヘブライ語の「温かく迎える」（口語訳では「喜んで迎える」）に当たる「ラーツァー」（同33：10）は、神によって「喜んで」「受け入れられる」犠牲を意味する神学用語であり、同時にそれは神の赦しを意味します（レビ22：27、アモ5：22）。

神の御顔を見た場所であるペヌエルでの神の赦しの経験が、今、彼の兄の赦しの経験に重なり、ヤコブには兄の顔がまるで神の御顔のように思えました。ヤコブは第二のペヌエルを生きるのです。第一のものは第二のものの備えとなりました。ヤコブはこうして神に赦され、そして兄に赦されます。彼は今以前にまさって、真に恵みの意味を理解します。

あなたは（神以外に）他者から赦された経験によって、恵みについて学んだことがありますか。

さて、兄と和解したヤコブは、平和にカナンの地に住むことを望みます。「無事に」という意味の「シャレーム」は（創33:18）、「平和」という意味の「シャローム」に由来しますが、初めてこの言葉が彼の旅を表現する言葉となります。

彼はカナンの住人から彼らの土地の一部を買い取った後、そこに祭壇を築きますが、それは彼の信仰と、彼がどれほど真実に主に信頼しているかを示すためでした。犠牲の一つひとつが献げられるたびに、そこで礼拝が行われました。

しかし、彼の生涯で初めて、ヤコブ（イスラエル）はこの地に住むことによって問題に直面します。イサクがゲラルでアビメレクと交わしたように（創26:1～33）、ヤコブはカナン人との間に調停を試みます。

問3 創世記 34 章を読んでください。平和に住もうとする彼の計画を脅かすどんな問題が起こりますか。

この忌まわしい事件は、人々の品性とその行為の曖昧^{あいまい}さを示しています。好色なシケムはディナを犯します。しかし彼はまた、誠実にディナを愛し、彼女にしたことの償いをしようとする者としても描かれています。彼は割礼の契約の儀式を喜んで受けようとさえします。

一方、神とその戒めの擁護者を自負するシメオンとユダは、カナン人との妹の結婚に反対し（レビ19:29）、嘘^{うそ}と欺きに訴え（創34:13）、彼らを殺し、略奪する準備をします（同34:25～27）。彼らの行為は非難されるべきものであるだけでなく（なぜ忌まわしい行為をした者だけを罰しなかったのでしょうか）、さらに多くの問題を引き起こすきっかけとなりました。

ヤコブとは言え、平和の維持にしか関心がなかったようです。娘が犯されたとの報告を受けても、彼は動こうとしません（創34:5）。しかしながら、息子たちがしたことを聞くと、次に起こることを心配し、あからさまに彼らをたしなめて次のように言います。「困ったことをしてくれたものだ。わたしはこの土地に住むカナン人やペリジ人の憎まれ者になり、のけ者になってしまった。こちらは少人数なのだから、彼らが集まって攻撃してきたら、わたしも家族も滅ぼされてしまうではないか」（同34:30）。

私たちは、これらの出来事の中に、親切と恵み溢れる行いと同時に、たび重なる嘘と欺きを目にしてきました。それは人間の性質について何を語っていますか。

問4 創世記 34：30～35：15 を読んでください。この出来事から私たちはどんな教訓を得ることができますか。

ヤコブは、カナン人との平和が危うくなったことに愚痴をこぼし（創34：30）、そのために2人の息子を叱責しました（同34：31）。その後、神はヤコブとの契約を更新するために、彼にシケムを去ってベテルに戻るよう強く促します。主は、そこに着いたら祭壇を築くようにお命じになります。

一方、この神のご命令の後に最初に記録されているのは、ヤコブが人々にカナン人の偶像を取り去るように語る場面ですが、事の発端はシケムの町の略奪品の中からラケルが盗み出した家の守り神の像でした（創31：19、32）。これらの清めの行為はすべて、神と契約を結ぶために非常に重要でした。

悔い改めの過程は、ある場所から別の場所に移る、あるいは一つの教会から他の教会へ移るといような物理的な移動以上のものです。最も重要なことは、私たちが神の恵みによって、住む場所によらず、偶像を心から一掃することです。なぜなら、どんなものでも偶像になり得るからです。

ヤコブが神に従ってご命令の通りに前進するとき、神は遂に介入されます。「神が周囲の町々を恐れさせたので」（創35：5）、彼らの中にあえてヤコブを襲う者はありませんでした。こうしてヤコブは、「一族の者すべてと共に」（同35：6）礼拝を献げる準備が整っただけでなく、家族の一致も回復されます。ヤコブはその地をエル・ベテルと名づけますが、それは、あの天と地を結ぶしるしであるはしごの夢を見た場所を思い起こさせます。そのはしごはしばらくの間壊れていたかに見えましたが、今、再び回復されたのです。

ここで強調されているのは、その場所そのものよりも「ベテルの神」です。再度登場するこの神の個人的な呼称は、神がヤコブの名を「イスラエル」（創35：10）と呼ばれることと呼応しています。この祝福には二重の約束が込められているのです。ヤコブの第一の祝福はメシアに至る豊かな子孫を意味し、多くの国民の群が起ることを意味します（同35：11）。第二の祝福は、「約束の地」を指し示すものです（同35：12）。

偶像はどのようにして私たちの心に住みつくのでしょうか。私たちはこれに対して何ができるのでしょうか。

問5 創世記 35：15～29 を読んでください。ヤコブは機能不全に陥った家族の中で、さらにどんな悲しみに直面しますか。

ヤコブがベテルを離れて間もなく、約束の地への道の最後に、それぞれに関連する三つの出来事が起きます。すなわち、ヤコブの最後の子の誕生、ラケルの死、そしてヤコブのレアとの最初の子であるルベンがヤコブの側女と寝るといふ事件です。聖書はなぜこの若者がこんな忌むべきことをしたのか、詳しく述べてはいません。ヤコブの最後の子の誕生を汚し、ラケルの思い出を卑しめるためであったかもしれません。私たちにはわかりません。

ヤコブの最後の息子の誕生はベツレヘムと関連があります（創35：19）。それは約束の地の国境の内側に入ってからでした。この誕生は神のイスラエルの未来のための最初の約束の成就を意味します。この時、助産婦は「心配ありません（恐れるな）」（同35：17を同15：1と比較）と語りますが、それはまさに、かつて神がアブラハムに語られた約束の再保証の言葉でもありました。

死にゆくラケルが生まれた息子につけた名前、「わたしの苦しみの子」という意味の「ベン・オニ」を、ヤコブが「幸いの子」（英語標準訳では「右手の子」という意味の「ベニヤミン」に変えたのには意味があります。右の方角はおそらく、彼の希望である約束の地を示す南であり、彼らが約束の地に住むとき、神が民のために与えると約束されたすべての祝福をも意味していたのです。

しかしそんな矢先、ルベンは父の側女であり、ラケルの仕え女であったビルハと性的関係を持ちます（創35：22）。

驚くことに、ヤコブはこの恐ろしい律法を犯す違反を耳にしても（創35：22）、何ら行動しません。おそらく彼の人生のこの時点では、ヤコブは、彼の周りに起きるたび重なる罪と悪にもかかわらず、神は御言葉を成就されることを信じていたと考えられます。

この的確な信仰の教訓は、やがてイスラエルの各部族の祖先となるヤコブの12人の息子たちのリスト（創35：22～26）からも読み取ることができます。彼らが、決して善良で親切な人間ではなかったことを私たちは知っています。しかし、それらのすべての問題、すべての機能不全、そしてルベンがビルハにしたようなあからさまな悪にもかかわらず、実に、この家族が、どれほどひどい状態にあろうとも、神の御心はこの家族を通してなお成就しようとしていたのです。

人間の過ちにかかわらず神の目的は成就されます。もし人々が神に協力し、従っていたなら何が起きていたでしょう。神の御心はもっと容易に、これほどの苦しみやストレスを伴わず、これほど遅れずに成就していたことでしょう。

参考資料として、『人類のあけぼの』第18章「苦闘の一夜」を読んでください。

「ヤコブの格闘と苦悩の夜の経験は、神の民が、キリスト再臨の直前に経験しなければならない試練をあらわしている。……

神の民も、悪の勢力との最後の戦いにおいて、これと同じ経験をするのである。神は、神の救出力に対する彼らの信仰、忍耐、確信を試みられる。サタンは、彼らの絶望的であること、そして、彼らの罪は大きすぎて、赦しを受けることはできないと思わせ、彼らを恐怖に陥れようとする。彼らは、自分の欠点を十分知っていて、その生涯をふりかえてみれば、絶望である。しかし、彼らは、神の大きな憐れみと自分たちの真心からの悔い改めを思い出す。そして、無力な罪人が悔い改めるときにキリストによって与えられる神の約束を懇願する。彼らの祈りが直ちに聞かれなくても、彼らの信仰はくじけない。彼らは、ヤコブが天使を捕えたように、神の力をしっかり握って、『わたしを祝福してくださいらないなら、あなたを去らせません』と心から言うのである。……

しかし、ヤコブの生涯は、罪に陥っても真に悔い改めて神にたち帰る者を、神は見捨てられないことを証明している。ヤコブが、自分の力をふるって獲得できなかったものを得たのは、自己降伏と堅い信仰によってであった。こうして、神は、彼の熱望した祝福を与え得るものは神の能力と恵みだけであることを教えられた。最後の時代においてもこれと同様である。彼らは危険に当面し、絶望に陥るとき、ただ、^{じよくごい}贖罪の功績だけに頼らなければならない。われわれは自力では何もできない」（『希望への光』99～100ページ、『人類のあけぼの』上巻218～220ページ）。

話し合いのための質問

- ① なぜヤコブの弱さは神の恵みの機会となったのでしょうか。ヤコブの経験は、パウロの「わたしは弱いときにこそ強いからです」（2コリ12：10）との言葉とどのように結びつくでしょうか。
- ② 聖書はそこに登場する多くの生涯の、多くのあさましい行為を、なぜこれほど詳細に記録しているのでしょうか。その目的は何でしょうか。私たちはそこからどんなメッセージを読み取ることができるでしょうか。
- ③ 偶像についてさらに考えてみましょう。私たちの文化、文明にはどんな偶像があるのでしょうか。主以外のだれかや何かを私たちが拜んでいないことはどのようにしてわかりますか。

祈りに対する二倍の答え

ロシアのモスクワの南にあるザオクスキー・アドベンチスト大学で、神学部の1年生の学生が、礼拝堂に走って行きました。ひざまずき、彼は祈りました。「主よ、なぜ私を祝福してくださるのですか？ 私は罪深いのです」。

20歳のヴァディム・アンテュシンは、「自分は神様の祝福に値しない」と強く感じました。この大学で学ぶ資格もないし、セブンスデー・アドベンチストの牧師になる召命も与えられていないと感じたのです。最初の学期のクラスが始まる直前、期せずして100ドルの贈り物を受け取りました。彼にとっては大きな額でした。「主よ、私はこのお金に値しません。あなたは私のすべての必要を満たしてくださいましたので、何も欠けているものはありません。このお金をどうすればいいのか、お示ください」と、ヴァディムは祈りました。ドルからルーブルに両替して什一を取り分けると、6000ルーブルが残りました。

数日後、1週間に1回会ってお祈りをする小グループに参加したヴァディムは、学生の1人が経済的な状況について祈っているのを聞きました。ヴァディムは黙って聞いていました。その学生のことを知りませんし、学費にいくら必要なのかもわかりません。その晩、彼は礼拝堂に戻り、祈りました。「主よ、このお金をクラスメートにあげたいと思います。あなたのみ心に従って、どうかこの計画を祝福してください」

次の日、ヴァディムはそのクラスメートを呼び止めて、直接話をしました。「いくら学費が必要なの？」と尋ねると、「6000ルーブルなんだ」と、クラスメートは答えました。ヴァディムは、神様が彼の祈りだけでなく、クラスメートの祈りにも答えてくださったことを知りました。彼は喜んで6000ルーブルをクラスメートに渡し、2人は抱き合いました。

そのクラスメートは、ヴァディムの親友の1人になりました。ヴァディムは言います。「彼と私は、多くのことを一緒に経験しました。彼は、本当にたくさんの方で私を助けてくれました。このような友を与えてくださった神様に感謝しています。神様は、私たちに必要なものを私たちが願う前からご存知です。最も大切なことは、神様を信頼することです」



「わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、……栄光が世々限りなくありますように、アーメン」(エフェソ3章20、21節)。

(アンドリュー・マクチェスニー)